様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 15 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０４３３
研究課題名（和文）中英語頭韻詩韻律研究:繰り返しの技巧と定型表現としての連語

研究課題名（英文） A Metrical Analysis of Middle English Alliterative Poetry: Repetitious Mode and Formulaic Word Collocation

研究代表者
守屋　靖代(MORIYA YASUYO)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：５０２３０１６５

研究成果の概要（和文）：
１）中英語頭韻詩のデータベースの構築。半行ごとに頭韻やストレス位置、連語構成等についてマークし、定型表現が頭韻音、語順、語の組み合わせから検索できるコーパス３万余行を完成させた。２）学会発表。国際中世学会、日本中世英語英文学会、英語史研究会等で研究成果を発表した。３）韻律と連語の解明。繰り返し登場する同一あるいは酷似した連語の成り立ちと韻律の関係を英文の著作にまとめ、６章分 250 頁程まで書き進めた。

研究成果の概要（英文）：
In alliterative verse, the repetition of the same sound establishes weight in sound and meaning since identical sound does not frequently initiate successive words in ordinary speech. In Middle English alliterative verse, another type of repetition is found in similar wording and phrasing as observed by Cable, Duggan, Oakden, Putter, and Turville-Petre. Using corpora consisting of approximately 30,000 lines of major and minor ME alliterative poems, I have analyzed the recurring collocation patterns of the second half-line, which is known to be structured by precise metrical rules. The analysis of the metrical and syntactic compositions of the second half-line illuminates whether recurring phrases and clauses can be considered as a special device in ME alliterative meter. Though not in the form of identical words, these collocation patterns seem to act as formulaic expressions and establish the unique mode of repetition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語史、英文学、中英語頭韻詩、中世英語、コーパス分析

１．研究開始当初の背景

平成15年度から平成18年度まで科学研究費補助金を受けた「中英語頭韻詩における口承様式の定型表現」研究において、中英語の韻文や散文に口承様式の定型表現が存在したか、頭韻の繰り返しによる遊びが英詩の伝統が形成されるなかでどのようにして文芸にまで高められていったかを解明を試み、主立った中英語頭韻詩の分析データを蓄積することができた。本研究の目的は、この先行研究で得られたデータを更に拡大して多面的に分析し、他の作品も加えて更に総合的なデータとして編集し、定型表現のように繰り返し登場する同一あるいは酷似した連語の成り立ちが、韻律の枠組みの中でどのように機能しているかを解明することであった。

中英語頭韻詩（Middle English Alliterative Verse）研究は、同時代の詩人チョーサーに関する研究ほど日本では広く知られてはいないが、多数ではないにしろ、優秀な研究者によってその意義が論じられて来た。頭韻詩形式は古いゲルマンの伝統であり、英語の音韻やリズムの解明に役立ち、文学専攻の学生にも英語学専攻の学生にも必須有用の知識である。日本の研究者、特に若い研究者にもっと古英語、中英語の伝統を強く保つ頭韻詩のことを知ってもらえれば、中英語すなわちチョーサー、という既成概念にとらわれず多面的な視座が開ける契機になるであろう。欧米の学会では、中英語頭韻詩の研究は、英語の特徴、ゲルマン文化を受け継ぐ表現として重要な分野と認識されており、研究者の数も多い。電子テクストやコーパスの広がりにより、資料の入手がたやすくなったことで、データ量を増やし、分析の信憑性を高めることが可能になった。日本人研究者がこの分野で研究成果を発信することは、現代の日本で研究する者に時として立ちはだかる時空の隔たりを乗り越えて、どのようなことが真に言えるのかを問うことでもある。

２．研究の目的

これまで 20 年以上に亘って中英語頭韻詩の韻律について研究を重ね、現代言語学に基づく韻律分析方法により、リズム、音韻、文体等と関連づけながら、国内及び国際学会で研究発表をすると共に、国内外の学術誌に研究論文として発表して来た。特に関心をもって研究して来たのは中英語頭韻詩における音の繰り返しの意義と、語の組み合わせ、すなわち連語（collocation）が文芸技巧として果たす役割についてである。前述の「中英語頭韻詩における口承様式の定型表現」研究において、中英語の韻文や散文に口承様式の定型表現が存在したか、古英語の伝統から始めて包括的に研究することによって、言葉による遊びが英詩の伝統が形成されるなかでどのようにして文芸にまで高められていったかを解明を試み、主立った中英語頭韻詩の分析データを蓄積することができた。このデータを多面的に分析して中英語頭韻詩の特徴ごとに検索しやすく編集し、定型表現のように繰り返し登場する同一あるいは酷似した連語の成り立ちが、韻律の枠組みの中でどのように機能しているかを解明することが本研究の目的である。

中英語は現代英語へつながる過渡期の言語として重要な位置を占めるものであるが、複雑な音韻変化、語形変化の単純化、おびただしい数のロマンス語語彙の借用など言語自体複雑な様相を呈するうえ、ヨーロッパの歴史的社会的背景がさまざまに絡み、古英語より解明が難しいとされている。そのため、中英語頭韻詩の韻律研究は、古英語頭韻詩の韻律ほどには研究者の合意を見ていない。伝統的な文学研究の方式や、現代言語学、殊に音韻論の研究方法等が用いられて来たが、近年国内外の研究者が強い関心を寄せているのが、コーパスを用いて頻度の分類から研究する方法である。先に韻律や語の組み合わせの基準を定めて合う合わないの判断をするのではなく、実際の現象を詳細にわたって分析し、全体の傾向から基になるテンプレートを導き出し、個々の行、また作品ごとに、忠実にルールに従うものと、そうでないものとに区別してその意義と役割を考えるアプローチである。

この研究では、古英語頭韻詩に用いられる口承様式を思わせるように繰り返し登場する一定の語の組み合わせに注目し、それぞれの作品の中で特定の連語が韻律とどのような関係にあるかを解明してコーパスを作成した。書き言葉を前提とした中英語頭韻詩ではあるが、声に出して読むことが依然前提とされていた当時において、繰り返しを好み、さまざまな技巧を駆使して独自のリズムを生み出した頭韻詩の詩人たちが、斬新的な技巧と古くからの伝統の両方をどのように取り入れたかを解明すれば、中世英語における文芸の意義を再確認し、また英語史研究にも貢献することができると考える。口承様式の定型表現を集め、音韻と統語の関係を明らかにし、個々の作品の特徴と全体に共通するテンプレートを明示することで 13 世紀から 15 世紀のあいだに英語文芸活動が頭韻詩において表現しようとした繰り返し表現の意味と言語変化を再構築することができたと考える。21 世紀を迎え、文学、言語学、フィロロジーにおける日本人研究者の緻密な学び

がこれからは世界に発信され、研究成果が世界に知らされていくであろう。この研究がその流れの一部となって欧米の研究者との交流がさらに深まれば、有用な機会となろう。

３．研究の方法

分析は、古英語頭韻詩に用いられる口承様式を思わせるように繰り返し登場する一定の語の組み合わせに注目し、中英語頭韻詩の中で特定の連語が韻律とどのような関係にあるか解明を試みた。これまでにデータとして蓄えて来た中英語の分析資料は、半行ごとに音韻と文法構成の情報をインプットして第一段階のデータベースとした。更に種々の古英語辞書、中英語辞書、コンコーダンスなどを用いて頭韻やストレス位置、語順等についてマークし、定型表現が頭韻音、語順、語の組み合わせから検索できるコーパスを作成した。中英語頭韻詩において行の後半が韻律を決定する重要な働きを担うという Thomas Cable, Hoyt Duggan, J. P. Oakden らの先行研究に従い、１）全行、２）前半行と後半行の間の構成、３）後半行の構成、４）後半行の連語、５）全体の韻律の５点について主立った作品約３万行以上について詳細なデータを得た。

４．研究成果

2010 年度は特別研究期間の年であったので、主に University of London, Institute of English Studies の研究員としてロンドンに滞在し、大英図書館及びロンドン大学図書館にて研究に集中することができた。その他にさまざまな大学図書館を訪ねたが、このような一次資料の閲覧は、テクストの読みを正確に行う点で有意義であった。国宝級の写本や稀覯本を直に読むことができたのは、個人の研究に深みと広がりをもたらしただけでなく、IT の恩恵を受けて今までになかった研究方法や資料が使われるようになった英語史研究の現状をつぶさに見る好機であり、研究休暇が明けた後、授業や学生の論文指導に活用できる有益なものであった。また、セミナー、ワークショップ、大学院の授業や口頭試問等に参加させてもらい、今の英語学の動向に触れ、教授達と情報交換を図ることができた。また途中訪ねたアメリカでも各地の大学図書館や学会で更なる資料を入手し、アメリカの英語史研究の最先端を垣間見ることができた。データベースは、３万余行を最終確認済みの状態まで完成させ、頻度による実例に鑑みつつ、中英語頭韻詩に繰返し登場する定型表現あるいはそれに似た役割を果たす語句についての著作にまとめ、６章分 250 頁程まで書き進めた。４年間の研究成果の集成となるはずである。全体の原稿が仕上がったところで出版社との交渉を図る。言葉による遊び、芸術の形としての詩、まして頭韻詩のように過剰な音の繰り返しを用いる言葉の芸術は、中世英語だけでなく他の言語、他の時代にも見られる普遍的な言語活動であり、14 世紀の英語の形を知る上で文学、英語学、英語史に役立つ資料として、日本の研究者のみならず欧米の研究者にも役立ててもらえると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Moriya, Yasuyo. “Recurring Collocations in Middle English Alliterative Verse: Metrical-Syntactic Patterns of the Second Half-Line.” *Studies in Medieval English Language and Literature* 25 (2010): 134. 査読有

② Moriya, Yasuyo. “Incorporating Multilingualism in the Development of the English Language into English Teaching.” *Educational Studies* 52 (2010): 1-18. 査読有

③ 守屋　靖代 「通時・共時で見直す英語の変化-そのプロセスと要因」ことばと人間　第７号 (2009): 1-16. 査読有

④ Moriya, Yasuyo. “‘As the Book Says’ and Similar Expressions in Middle English Alliterative Verse.” *ICU Language Research Bulletin* 23 (2007): 61-75. 査読有

〔学会発表〕（計 7 件）

① Moriya, Yasuyo. “Collocation Patterns of Middle English Alliterative Verse: Formulaic Expressions in Repetitive Mode.” The 17th International Medieval Congress, Leeds, UK, July 14, 2010.

② Moriya, Yasuyo. “Recurring Collocations in Middle English Alliterative Verse: Metrical-Syntactic Patterns of the Second Half-Line.” The 25th Congress of the Japan Society for Medieval English Studies, Keio University, Tokyo, November 29, 2009.

③ Moriya, Yasuyo. “The Meter of *The Siege of Jerusalem*: Norms, Deviations, Idiosyncrasy.” The 44th International Congress on Medieval Studies, Kalamazoo, Michigan, USA. May 7, 2009.

④ Moriya, Yasuyo. “Incorporating Multilingualism in the Development of the English Language into English Teaching.” AILA 2008 (Association Internationale de Linguistique

Appliquée), Essen, Germany, August 29, 2008.

⑤ 守屋　靖代　「通時・共時で見直す英語の文化・社会」 第34回言語と人間研究会春期セミナー、神奈川、2008年3月17日

⑥ 守屋　靖代　「中英語頭韻詩における“Tags”-Oakden の7類型の見直しと連語類型による再分析」英語史研究会大会、京都大学、2007年10月13日

⑦ Moriya, Yasuyo. “Tags in Middle English Alliterative Verse: Their Relation to Alliteration and Metre.” The 14th International Medieval Congress, Leeds, UK, July 9, 2007.

〔図書〕(計1 件)

① 守屋　靖代　「中英語頭韻詩における繰り返しの技巧と連語」東京：南雲堂出版、2010、 301頁.

６．研究組織

(1)研究代表者

守屋　靖代 (MORIYA YASUYO)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50230165

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし